

成岡道男 (NARUOKA Michio)

主任研究員

博士 (農学)、技術士 (農業部門)

1964 大阪府生まれ

1995 鳥取大学大学院連合農学研究科
鳥取大学乾燥地研究センター

1996 農用地整備公団→緑資源公団→緑資源機構

2008 国際農林水産業研究センター

2014 農研機構農村工学研究所



研究者の横顔

〈さまよえる研究テーマ〉

研究の世界に足を踏み入れる切っ掛けは、30年以上前にエチオピアで発生した飢饉でした。「彼らのために何かできないか」という思いから、砂漠化防止の研究が盛んだった鳥取大学乾燥地研究センターに進みました。卒業後に農用地整備公団 (緑資源機構) に就職し、アフリカや中央アジアの乾燥地での調査活動を経て、国際農林水産業研究センター、そして農村工学研究所へと活動の場を移してきました。しかし、農工研に移動してからは、砂漠化防止から離れて、水文学や農地整備へと研究テーマが変化し、現在では鳥獣被害対策を手掛けるようになりました。鳥獣被害対策って、何をしているの?と思う人も多いと思うので、私が経験した銃猟によるシカの管理捕獲の状況を少しドラマ風に説明します。

〈成岡が経験したシカの管理捕獲〉

「成岡さんの方へ行ったぞ。」無線機を通して、親方が連絡してくる。遠方から狩猟犬の鳴き声が近づいてくる。夜明け近くから鉄砲を持って、指定された場所に立ち、獲物が現れるのを待っていた。しかし、こっちに来てほしくないという気持ちもある。外したら親方に怒鳴られるんだろうな。でも、仕留めたい。

頭の中で葛藤していると、「ザッザッ」という音が聞こえてきた。シカが走ってきているのに、聞こえる音は思ったより小さい。眼鏡の右端に何か映った。親方からは、「銃は振るな。獲物は必ず目の前のオツ (獣道) を通る。銃を前方に固定し、獲物が通るときに頭を打て。」と言われていた。走ってくるシカの頭に、俺の腕前で弾が当たるわけないだろうとぼやきながら引き金を引いた。

銃声が耳に響く。でも、なんで…。シカは走り続けているのに、俺の弾がシカに当たっていることが解った。時間がゆっくり進んだ。シカの背丈が縮んだ?いや、シカがゆっくり倒れ、斜面を転がり落ちているんだ。はじめてだ。はじめて銃で生き物を撃った。時が止まった。

「モノ (獲物) は仕留めたのか。」無線機から聞こえる親方の声が、意識を引き上げた。「成岡、マル (獲物を仕留めた) です。」「確認して、血抜きしろ。」「了解しました。」無線を切り、銃に残った弾を抜いてから斜面を降りた。20mほど下った先に、はじめての獲物が転がっていた。「ごめんね。」自分で殺めておきながら、そんな言葉が自然と出てきた。



狩猟犬 (首の箱は GPS 発信機)